

田中淳夫さん

(森林ジャーナリスト)

日本人は森林を誤解している

豊かな森は国の宝。遠くから眺めても、その中を歩いても気持ちがいい。古いにしえから日本人は森とともに生きてきた。だが田中さんは「そうではない」と言う。森との共生などは幻想であり、情緒を排し、科学的に森を考え直すべきだと主張する。

森の本当の姿

——日本で唯一の森林ジャーナリストとして活動を始めた経緯を教えてください。

東大阪で生まれ育った私は、子供のころから生駒山で遊んでいました。身近な遊び場所として森があったんです。その影響か自然科学に興味がわいて静岡大学農学部に進んで林学を学びました。

しかし、卒業後は一度、森から離れました。出版の世界で働きたいと森林とはまったく関係がない編集プ

ロダクションに入社したんです。森から離れてみて、新聞やテレビなどで報じられる森林に違和感を覚えた。一般的に語られる森林が間違いだらけなんじゃないか。世の中の人々は、森林について知らなすぎるんじゃないかと。

森林の生態系や林業を調べ直してみました。いよいよ世間で語られる森林が間違いだらけだと確信しました。そこで勝手に、間違いは私が糾たださなければいけないんじゃないか、と思うようになったんです。

そこで独立して、フリーライターになりました。日本全国の林業の模範とされてきた吉野林業を知るため

に、大阪の自宅から奈良県の吉野山に月に一、二回ほど通って山仕事を手伝いながら、吉野林業について学びました。朝四時に起きて、自動車で二時間かけて吉野山に通う。それで朝六時から山仕事をやる……。きつかったけれど、楽しかった。本当にいい勉強になりました。

——世の中で語られている森林は、具体的にどのような間違いがあるのでしょうか。

「森林は、我々が呼吸している酸素を生産している」「水を蓄える」とよく言われます。また「森林は地球の肺」なんて言い方もある。でも、まずそこから間違



たなか・あつお 1959年大阪府生まれ。静岡大学農学部卒業。主な著作に『樹喜王 土倉庄三郎』『樹木葬という選択 緑の埋葬で森になる』『森林異変』『森と日本人の1500年』『ゴルフ場に自然はあるか？』『くられた「里山」の真実』など。

っている。単純に言えば、森は酸素を出していない。水も蓄えない。逆に酸素と水を消費しているんです。

——森が酸素を作り出していると思っている人も多いと思います。どんな仕組みなのでしょう？

中学時代まで私は「動物は酸素を吸って二酸化炭素を吐くが、植物は二酸化炭素を吸って酸素を吐く」と思っていました。要は、植物の呼吸と光合成を混同していたんです。光合成とは光エネルギーと水と二酸化炭素から有機物を合成して、酸素を出す仕組みです。一方の呼吸は有機物を酸素によって分解して、エネルギーと二酸化炭素と水を放出するシステム。つまり光合成と呼吸は裏返しの関係なのです。

動物は呼吸するだけですが、植物は呼吸も光合成も行ないます。確かに生長中の植物は、酸素の生産量が呼吸による消費を上回っている。一本の樹木だけを見れば、酸素を供給していると言えるでしょう。

でも森林に生えているのは、生長している樹木だけではありません。朽ちた木もあれば、光合成を行わない植物もいる。キノコやカビなどの菌類も行なわない。森林にいる微生物も光合成せず、酸素も出さない。また植物が枯れて腐ると微生物が活動し、酸素を消費